
新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)

拡大下での博物館実習

Museum practice under the spread of
a new coronavirus (COVID-19) infection.

山内 利秋 *

Toshiaki Yamauchi

abstract

The spread of the new coronavirus (COVID-19) has affected a variety of activities.

Even in museum training, which is essential for the training of museum curators, a different response was required than in previous years.

The development of online classes and other measures to deal with infectious diseases has had a major impact on new teaching strategies that have not been pursued in the past.

Online classes have brought about a new way of thinking about communication for both teachers and students that is different from face-to-face classes.

キーワード

新型コロナウイルス・博物館実習・オンライン授業・学芸員養成

1: はじめに

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染拡大が、様々な活動に影響を与えている。大学では授業の長期休講やオンライン化、さらに対面授業復帰後も感染リスク回避を実行しながらの日常が続いている。

多くの資格課程に関わる科目には実習科目があるが、直接的なコンタクトや現場での体験を要するケースが多く、その結果授業開始時期の先送りや様々な配慮が必要となり、さらには実習先との調整にも苦慮している。

学芸員養成に関わる科目である博物館学実習もこの例に違わず、博物館学内・学外実習それぞれにおいて例年とは異なった対応が求められた。

一方、オンライン化をはじめとする感染症対応への展開は、これまで遅々として進められてこなかった新たな授業方略にも強い影響を与えた。オンライン化は対面授業とは異なったコミュニケーション方法や考え方の再検討の必要性・重要性を、教える側・学ぶ側双方に対してもたらしていると言っても過言ではないかもしれない。

本稿では、令和2年度の九州保健福祉大学での学芸員養成課程において実践・模索された、新型コロナウイルス感染下におけるオンライン授業の中での博物館学内実習への取組みについて紹介していく。

*九州保健福祉大学 薬学部

2: 博物館実習の動向

新型コロナウイルスの感染拡大は、対面授業主体で行われてきた日本の多くの大学での授業運営に大きな影響を与えている。これは実習形式の授業を抱えている種々の資格課程にとってはひと際困難が大きく、関係する省庁も対応に苦慮している事が様々な文書から確認出来る。

感染症対策について文部科学省から出された大学に対する文書としては『新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について(依頼)』(令和2年1月24日事務連絡)が最初で、この段階では安全確保に対する注意を促す程度であった^(註1)。

だが、入学試験への配慮にはじまり、2月から3月にかけての段階で感染が日本においても拡大しはじめ社会での動揺が広がるとともに、感染リスクが大きくなった事から、2月25日には『学校の卒業式・入学式等の開催に関する考え方について』(2月25日付事務連絡)にて「実施方法の変更や延期などを含め、対応を検討」する事が求められ、その結果を受けて各地で卒業式—さらには入学式も—の中止や縮小が相次いだ。

3月後半時点ともなると短時日に控えていた令和2年度の授業開始をどうするかに関心が集まり、対応の検討が求められる事となっていった。そして3月24日付『令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)』(元文科高第1259号)では、小中高等学校と異なって一斉休校等の処置が出されていなかった大学・高等専門学校に対しても「感染の拡大防止措置の実施や学事日程の編成等」に際しての留意事項が通知された。以後、令和2年度の授業についてはこの通知がベースとなって年間スケジュールを再構成した大学が多かったと考えられる。

通知に記載された重要な点として挙げられるのが「遠隔授業の活用」である。今日オンライン授業やリモート授業と呼ばれるテレビ会議システムを活用した遠隔授業、MOOC等オンライン教材を用いた遠隔授業を実施している大学はこの通知が出された時期には限定的であったが、新型コロナウイルス感染拡大に対応して急速に推進される事となっていった。

九州保健福祉大学では授業開始が1ヶ月程遅れたゴールデンウィーク直後となった事から、その間この遠隔授業の運営ノウハウを学内の情報教育センターを中心に急速に蓄積・構築し、教員向け研修、さらにはオリエンテーションで分散して来学した新入生を含む通学生の全学生向けに指導し、オン・ザ・ジョブ的なスタイルながらオンライン授業を実施する準備を整えた。授業はgoogle meetを利用したweb会議方式(ライブ方式)で行う事となった。

授業実施には目処が立ったものの、実習や演習といった身体的コンタクトやコミュニケーションが重視される科目については課題が多かった。九州保健福祉大学は医療福祉系分野が主体であるので、この実習・演出科目の占めるウェイトが高く、「三密の回避」がどうしても難しい側面が生じていた。

文部科学省からは、4月3日付で『令和2年度における介護等体験の実施にあたっての留意事項について(通知)』・『令和2年度における教育実習の実施にあたっての留意事項について(通知)』が出され、本学でも実習系科目を進める上で一つの基準として検討した。特に教育分野である『教育実習の留意事項』は生涯学習分野に近接しており、学芸員養成課程での授業運用での参考となった。

学芸員養成課程そのものについては、令和2年4月13日付けで国公私立大学長宛

に『令和2年度における学芸員養成課程に係る博物館実習の実施に当たっての留意事項について(通知)』が文化庁企画調整課長名で出されている。ここでは特に博物館実習のうち館園実習についての留意事項が記載されているが、「実習の一定割合を学内実習に振り替えることや、例外的に演習等で実習に代えることも可能とするなど」、実施内容の弾力的な検討が求められている。しかしながら、文化庁からは学内実習に関わる具体的な指針が出された訳ではなく、シラバスを基本としながらも各大学の方針や都道府県における感染状況の推移をうかがいながら、授業方略を再検討していかなければならなかった^(註2)。

ところで4月3日という段階で学校教育に関わる実習指針が出された際、筆者には「生涯学習分野はどうなっているのか」という疑問が浮かんだ。各大学の学芸員養成を担当する教員と情報交換を行っている際にも、皆同様の疑問を有していた。

そこで筆者ら有志は全国大学博物館学講座協議会関係者を通じて、監督官庁である文化庁へ通知を出してもらうように依頼出来ないかと要望を伝えた。恐らくその他複数のルートから文化庁に対して同様の相談・要望があったと考えられるが、結果的に他分野から遅れて10日で同庁から『博物館実習に当たっての留意事項』が出された。これは学芸員養成課程を有する大学宛に通知されたものだが、日本博物館協会や日本動物園水族館協会といった関連団体に対しても送付された事で、実習受入館園側に対して大学側の事情に一定の理解を求め、柔軟な対応を促してもらえたのには一先ず安堵感が生まれた。

3: 学内実習をどうするかー新しいツールの活用が授業にもたらしたものー

本学での博物館学内実習では、例年地域社会の課題をテーマとした企画展示を実施している。展示を実現させるために重要視しているのが学生間の合意形成プロセスであって、このための時間を毎年多く割いて必要十分なコミュニケーションを確保しているのが常である。この作業を通じて、展示表現に欠かす事が出来ない言語化の能力向上をはかる訳であるが、コロナ禍にあっては従来のままの授業が実行出来ないのは明らかであった。例年展示会場としてスペースをお借りしている延岡市民協働まちづくりセンターも、貸し出しが出来るかどうか分からないとの事であり、企画展示の開催は困難と判断した。

授業開始まで間がなくいい方法はないものかと思案していた所、ふと思い立って学会等で顔を合わせる事がある展示プランナーの亀山裕市氏に相談してみた所、「展示模型制作はどうだろうか?」というアドバイスを頂いた。基本的に建築のスタディモデルと同じ手法であり、なるほどと思い立って試しにスチレンボードを切って組み立ててみたが、上手くいける感触を得た。受講生は6人いるので全体を6部屋とし、組み合わせると一つの企画展示会場となる模型製作を目指す事にした。会場での展示は難しいので、一先ずは各人が自分の作成した模型を動画撮影して紹介する、アーカイブを構築するまでを目標とした。

さらにもう一つ、展示に至るまでの学生間の合意形成をどのように図っていくかがある。

実空間での企画展示の実施が困難である事は明らかであり、そうした事から展示スタディモデルの制作を行うという方針は定まったものの、実際の制作に至るまでプロ

セスを検討する必要があった。言ってみれば学部生クラスで可能な展示は限られたものでもあり、ましてやデザイン、広く「観せる」という考え方について限定的にしき授業で扱われていない専攻分野でもある訳なので、クオリティの部分よりも重要なのは展示に至るまでの企画化・合意形成手法といった、いわばコミュニケーションデザインについての考え方や手法の獲得をこれまで求めてきた。

そうした側面からオンライン上で可能な様々な学修方策を検討していた所、UI/UXデザインなどの分野で活用されているツールであるオンラインホワイトボード "miro" の存在を知った^(註3)。これは模造紙に項目を記載した付箋紙を貼ってまとめていく、ブレインストーミングタイプのオーソドックスなワークショップツールをオンライン上で行う事を可能としたものであった。

しかし、miro は慣れるまでに多少の時間が必要であり、日本語化されていない事もあって、学生には少々使いにくいのではと考えられた。そこで、miro よりも少々「取っつきやすい」オンラインツールである "google Jamboard" を利用した。Jamboard は google の諸ツールの中にあるので、google アカウントを利用している本学学生には使い勝手がいい。オンラインホワイトボードという未知のツールに慣れてもらうためには、ボードサイズが小さく、機能も限られているもののシンプルなこの Jamboard の活用は有効であった。

博物館実習第 1 回目の授業において、実習ガイダンスを経た後に早速使用してみた。Jamboard を使ったテーマとして選んだのは、展示企画には直接的に関係のない「コロナ」の問題であった。感染症拡大によって授業開始が遅れ、学生は自宅から外に出る事を 1 か月もの間制限されている。こうした状況では学生には多くのフラストレーションが蓄積していると考え、ひとまず、そうした鬱憤を吐き出してもらえないだろうかと考えた。

ボードは人数分をこちらで作成しておき、大学の google アカウントでログインすれば他人のボードも見られる共有設定にした。google meet や google classroom といった google 系のツールを使っての授業では Jamboard は親和性が高く、リモート下で各人が使用した状態においてこちらで受講生が作業している様子を切り替えながら画面共有しても問題はなかった。ただ学生の PC 環境に配慮して一定時間は google meet を切断し、決まった時間に再度ログインするようにした。それでも、こちらの作成した同一 URL のボードの各ページ単位に一人一人が作業するようにしているだけなので、受講生相互が作業の様子を確認できる状況は保っていた。もちろん、学生間で LINE 等のコミュニティツールを使ってのやりとりはしていたのだろう。

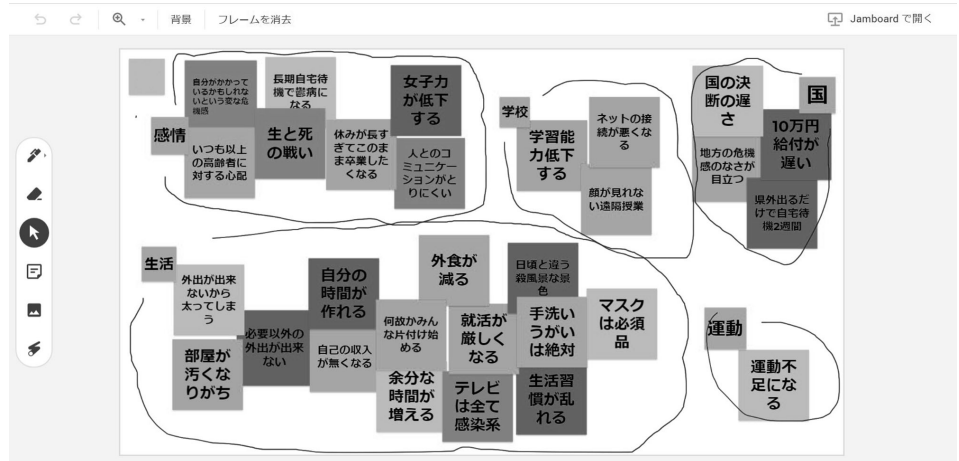


写真 1:google jamboard に 1 人の受講生が書き込んだコメント

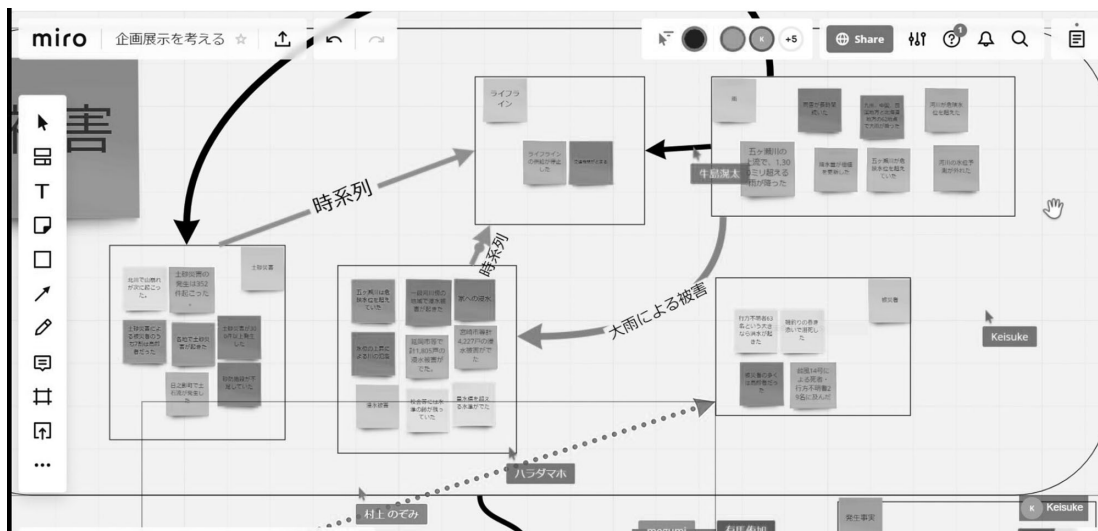


写真 2:miro を使ったワークショップ

すると彼等一人一人から実に多くのコメントがホワイトボードに貼られ、さらに分類されていった (写真 1)。受講生からも、この Jamboard は簡単に出来たという意見が多く、ひとまず慣れてもらうには実に有効なツールであった。

そして miro である。果たして上手くいくのかどうか多少の不安はあったが、学生は jamboard を学修した事によって一定の慣れが生じ、また、多様なツールの使い方もすぐさま習得してしまった様子であった。それならばと例年と同様、ある地域課題に関わるテーマを与えてこれについてブレインストーミングによって議論を拡張・収斂させ、展示計画を策定していく方式を採ってみた。

平成 17(2005) 年、九州地方に上陸した台風 14 号は宮崎県に他大な被害をもたらしたが、令和 2(2020) 年はそれから 15 年目にあたる。阪神淡路大震災や東日本大震災の事例で言われているように、災害の記憶の風化は早いスピードで進む。そこで、今回は「台風 14 号災害の記憶」をテーマに選んだ。

miro を使ってワークショップを行うに際しては、ホワイトボードでの作業のみならず音声でのコミュニケーションが必要となる。ただ受講生のネットワーク環境が一律ではなく、特に学生向けのスペックの高くない PC を使用していたりするので、教員側には相応の配慮が必要となる。そこで google meet のカメラはオフにして音声のみの接続とし、miro は画面共有にせず各自のブラウザで閲覧するようにして PC の負荷を低下させた。そうした所、「音声は googlemeet、観ているのは miro」という状態が各人のデスクトップに形成・共有され、そこからあたかも目の前で模造紙の上に付箋紙を貼っていくような、学生主体のワークショップが繰り広げられた (教員の指示は最小限にとどめた)。彼等が夢中になった様子は、やり取りをプロジェクターで拡大して教室で黙って観ていた筆者にはよく伝わってきた (写真 2)。

4: スタディモデル制作とアーカイブ作成

miro を使って計画した展示プランをベースに、今度は展示スタディモデルの制作に移っていった。

材料はスチレンボードをベースとして床と内外壁をつくり、内装は床面に貼る薄いバルサ材、展示器具類を表現する色画用紙・竹ひご等の基本的な素材をこちらで揃え

ておき、後は各人が自由に工夫できるようにした。たまたま受講生全員が延岡市内に居住していたため、大学には来学させずコンビニ駐車場等で待ち合わせて材料の受け渡しを行った。

模型制作については最も基本的な部分は筆者がビデオ・オンデマンドを自作し、youtubeの限定URLで公開したものをgoogle classroomから閲覧してもらうようにした。教員のオンデマンド講義は冗長になりがちであるが、極力内容を短く区切るようにした。"youtuber"と呼ばれている人達には模型制作を専門に行っている方々があり、この方々のコンテンツは大変参考になった。さらに細かな制作方法については、先に亀山裕市氏から紹介して頂いた建築模型等のコンテンツを参考にもらった。

こうして材料を配布し、映像コンテンツをも参考にしながらその都度「このあたりまで」との目標到達点を定め、オンライン授業時間時に出来た所までを説明してもらい、それを指導していくという方向性が確立したのだが、このタイミングで対面授業に戻る事となった。宮崎県は首都圏や近畿圏等とは異なって春から夏にかけての感染状況はそれ程深刻ではないと考えられたので、なるべく対面に戻りたいという意向が働いた。自治体と協議を経て大学の授業が対面に戻ってからは、感染症対策を取り入れながらの授業運営が求められた。受講生各人の担当を各人なりに調査・検討し、時には他のメンバーと意見交換しながらより具体的な展示設計に繋げていく。このスタイルを今年度はオンラインでやるものだと意識していたので、途中からの対面授業への復帰は少々中途半端にならないかと多少の不安を感じた。

模型の縮尺は色々検討したが、最終的に建築模型で一般的な1/50スケールに定めた。スケール尺度にあわせて、パネル(一部タイトル部分等は縮尺も検討して文字を小さく書き出したりも行う)や展示ケースの配置、人が椅子に座った時に観る角度を踏まえたプロジェクターやモニターの配置、オリジナルの展示具の作成やバリアフリーへの配慮といった、ミニチュアではあるが内容についてはなるべく妥協しない姿勢を受講生に求めた。パーティションの移動等オリジナルの展示空間を「創造」出来た事によって、これまでの企画展示では実現が難しかった多様な展示手法について受講生達と検討していったのは大きな収穫であった。こうして各ブースを受講生1名、あわせて6つのブースの展示が完成し、これらを接続すると一つの企画展会場が形成された。それぞれ一人で担当する訳であってどうしても技量の差は生じてしまうもの



写真3: 組み合わせたスタディモデル (オープンキャンパスでの展示)



写真 4: 映像アーカイブ

が、来館者対応について及ばなかったのは仕方がない。しかしながら、例年と比べて遜色ない受講生たち自身の評価ではなかったかと考えている。

の、全体で一つの大きな展示ストーリーが成立していた(写真3)。

最終段階で各自制作した模型を映像で撮影し、アフレコも含めた編集作業を行って一人数分間の映像アーカイブを作成し、作品講評会をあえてオンライン状態にして相互評価を行った(写真4)。その上で、再び miro を使って計画からアーカイブ上映まで含めた最終的な評価(受講生によるピア評価)を実施した。

この評価の中での論点は例年と同様に計画—制作—展示の中から出てきた課題点や到達点であった

5: おわりに

学内実習の授業は前期で終了したものの、折角の作品をどこかで展示出来ないのかと考えていたので、7・8月にそれぞれ開催されたオープンキャンパス(入場者を限定して開催)の際に、なんとかスペースの一角に配置した。これで入学を考えている高校生達には多少なりとも観てもらえた。さらにはまた、大学附属図書館の快諾を得て、後期段階でスタディモデルを展示する事が叶った。少なくとも学内関係者の目には留まったのではないかと考えている。

令和2年度は従来とは性格の異なった授業展開が必要だった訳だが、学生のみならず、教職員の ICT リテラシーや授業方略の再点検・向上に結び付いた側面も多い。各地の学芸員養成校の取り組みにもそうした一端がうかがえる^(註4)。日本国内のみならず世界各地の博物館も長期間の休館を余儀なくされたり、経営がひっ迫する事態にまで直面してしまった所もあるが、一方で資料の 3D データ配信の拡張や「おうちミュージアム」といった新たな情報発信を行う等、これまでとは異なった活動を展開している所が出てきている。もちろん、感染症対策もこの新しい活動に加えられるのは当然であろう。

東日本大震災前後に学芸員養成課程の授業の中でも災害時の博物館の対応が学修すべき項目として含まれるようになったが、社会的に重要な動向を大学の学芸員養成課程に反映させていくとするならば、この令和2年度からの動向は、将来学修すべき項目として決して無視出来ないトピックスとなるのではないだろうか。

註

1: 同通知では「新型コロナウイルス関連肺炎に関する WHO や国立感染症研究所のリスク評価によると 現時点では本疾患は 持続的なヒトからヒトへの感染の明らかな証

拠はありません。風邪やインフルエンザへの対策と同様に咳エチケットや手洗い等通常の感染対策を行うことが重要」と記載されている。この段階から本稿執筆時点である令和3年3月頃に至るまで、国が国民に対して求めている、ベースとなる感染対策が変わっていない事が改めて理解出来る。

2: 『博物館実習の実施に当たっての留意事項について』を確認すると、これが『介護等体験の実施にあたっての留意事項について』や『教育実習の実施に当たっての留意事項について』といった先行して出された通知と基本的に同様なフォーマットで記載されている事が理解出来る。

3: オンラインホワイトボード "miro" については次の URL を参照の事。

<https://miro.com/>

4: 全国大学博物館学講座協議会では、コロナ禍における各大学の学芸員養成教育にかかる取組みを記録に残す事を目的として、加盟各大学に対してアンケートを実施している (全国大学博物館学講座協議会 2021)。

参考文献

全国大学博物館学講座協議会 2021 『COVID-19 パンデミックにおける学芸員養成課程授業実施に関するアンケート調査の報告』同協議会